飛躍へ！浜松ベンチャー企業の魅力

遠州ベンチャー企業 2018飛躍への誓い

時代のニーズを背景に、独自の技術や製品で急成長している企業は「ベンチャー企業」と呼ばれ、特に近年の情報通信関連などでは、周辺機器・ソフトウェア開発・情報サービスなど、数多くのベンチャー企業が輩出され、遠州地域でもその息吹は確かだ。「ベンチャー」という言葉の捉え方は、人それぞれ様々だろうが、今回は社歴、会社規模、業種を問わず、新しいものづくり・独自のサービス提供・社会貢献など、何かを作り出している企業をベンチャーと意義付け、遠州地域のベンチャー企業数社をご紹介。まず、浜松のベンチャー企業の草分け的存在である㈱NOKIOOの小川健三社長のインタビューからお届けします。

未来志向の経営に見る将来性は？

NOKIOO

株式会社NOKIOO（ノキオ）　小川健三社長
浜松市東区和田町919-3　☎053-545-5105
URL http://nokioo.jp

企業集積で新たな展開を

―御社は創業7年目ですが、社長の前職は？

大学卒業後、NECに入社し、官庁向けのシステムの営業をしていました。ずっとIT畑でしたね。

―独立するきっかけは？

大企業の決められた枠の中で、限られた仕事が続いていく事に戸惑っていました。自分が社会に対して何が出来るか？と悩みましたし、大企業を飛び出て地方に行き、小さなベンチャー企業で働けば自分のキャリアに振れ幅を持たせる事が出来ますし「苦労する事」自体が自分自身の価値を高める可能性があると考えていました。今だからこそ、このように言葉に出来ますが、当時は具体的に何をやるという事もなく、感覚的なものでした。

―会社を辞めて浜松に戻り、すぐに起業したのですか？

幾つかの会社に就職し、働きながらネットワークを広げ良い人脈が形成された頃、その仲間たちとベンチャー企業を作ろうと決めました。それが2011年の4月で、東日本大震災の直後です。ちょうど前年位から、アイフォーンをはじめとしたモバイルが世

飛躍へ！浜松ベンチャー企業の魅力

の中に浸透し、フェイスブックやツイッターなどのSNSも広まり、情報の流れや社会の構造がパラダイムシフトしているという印象がありましたね。社会が大きく変わっていく中で、自分たちがその中心にいたいという思いが強くなり、独立に至りました。

地元ベンチャーを支援

—なぜ東京でなく、敢えて地元に戻る選択をされたのでしょうか？

ITビジネスや起業には場所を問わないと考えていたからです。しかし、実際は情報格差があり、東京と地方ではベンチャー企業の成長の仕方が違いますし、東京は情報やお金が集まりやすく、ベンチャーキャピタルや投資家の目に留まりやすいのです。

これは地方では難しく、世の中的にも地方にベンチャー企業があるという事は認知されていません。そこに私は課題意識を持っており、地元が好きで、浜松で仕事をしたいと考える人は少なくないと感じていますので、こういった所に風穴を開けたいと思います。

—具体的に考えている事はありますか？

昨年から始めた「ベンチャートライブ」というコミュニティや、「浜松スタートアップニュース」というウェブメディアを通じて、当社が外部に対してプロモーションし、浜松・ベンチャーというフィールドに新しい風を吹かせたいと思っています。

—働く場所としての弊害は少なくも、クライアントや協力会社として見た浜松の企業の可能性は？

クライアントとしても、コラボ先としても優良な企業が多く、他の地方都市より恵まれていると思います。当社とお付き合いがある浜松のベンチャートライブのメンバーのクライアントは浜松ばかりではありません。

—創業からこれまでを総括すると狙い通りと言えますか？

そんな事はないですね。ベンチャービジネスのスピード感や動き方は、私自身が経営者になってようやく見えてきた面もあります。3年目あたりから経営者として学ぶ事を意識し、外とのつながりが増えました。外部のベンチャー起業家の方と話をすると、自分たちとの考え方の差も感じましたし、憧れを抱くようにもなりました。大きなビジョンを掲げないと地域に風を吹かせたり、従業員を引っ張っていく事は出来ないと思いました。

—ベンチャーと聞くと、飛躍的に伸びていくために、技術やノウハウありきといった部分が前面に出るようなイメージがありますが、それだけではないのですね。

社員がいくら良い技術を持っていても、組織の成熟度が上がっていかなければそれを生かす事は出来ません。当社では、早い段階から人事制度を作るなど組織づくりにこだわり、理念やビジョンを定めました。こういった部分から差が出てくるのではないかと思います。

—御社の主な仕事を教えて下さい。

ウェブ開発と、子育て女性の社会参画を促す事業の2本柱です。後者は、社会や企業の課題でもある子育て支援として、女性にセミナーや研修などの機会を提供しており、現在、約6千人のネットワークがあります。

—こういったものは企業側としてもとてもありがたい事業ですね。

実際は各企業が自らこういった支援に動いてもらい、仕事と生活を両立するための人づくりをしていかなければならないと思います。仕掛けも

ポルシェを楽しみませんか…
PORSCHE
ポルシェに関するご相談はお気軽にご連絡下さい。
ポルシェセンター浜松
静岡スバル自動車株式会社
〒435-0044 浜松市東区西塚町301-5 TEL:053-461-4180
営業時間 9:30～18:00　定休日:月曜日、第2・第3火曜日
http://www.porsche.co.jp/dealers/pj_hamamatsu_index.php

飛躍へ！浜松ベンチャー企業の魅力

重要ですが、そういう社会になっていく事が大切です。

―ベンチャー企業として一番苦労した点は？

日本全体の傾向かもしれませんが、かつては製造を中心としたオペレーション仕事が中心で、既存のやり方を正確に実行するための人づくりが企業運営のメインだったと思いますが、現在、それは崩壊していて、新しく価値を創造できる人材か否かがとても重要になってくると思います。

これからの時代は、企業に参画する社員一人ひとりが考えを持って仕事をしなければいけません。これはベンチャー企業に限った事ではなくなってくるでしょう。当社でもこの事は徹底しており、現場が戦略を考えるくらいでないといけませんし、それが自身の働き方という部分にまで関わってきます。そういう志向を持った人づくり、人集めに苦労しましたね。

―社長が考える「組織」は、トップダウンではないのですね。

時代ごとに、より良い形に変化し、進化し続ける「ネットワーク組織」を目指そうと考えています。

また、ベンチャー企業同士がジョイントベンチャーを組んで、外の組織や外の人と1つのビジョンに向かって協力していく事も必要だと思います。それが私の頭の中での組織感ですね。ベンチャー同士のコミュニティを作り、「集団出世」したいです。

―浜松ベンチャートライブの立ち上げは何社でしたか？

5社でスタートしました。先日、第1回のミートアップの際はベンチャー起業家が30名ほど集まり、行政や金融機関などの支援者も20名ほど来られました。

―上昇志向の強い方が集まられたのですね。

私の中では、ベンチャー企業とはリスクを背負いながらでも社会を巻き込み、社会にインパクトを与えるものだと考えています。今後も、そういったマインドを持った人達の集まりを作っていきたいです。

―ベンチャー企業から見た浜松の将来は？

まだまだこれからで、可能性の高い地域だと思います。志の高い人が集まり、夢を持った事業を自由に実現できるような地域となるよう尽力したいです。

―お忙しいところありがとうございました。今後の更なるご活躍を期待しています。

多業種に渡る期待企業5社

リンクウィズ

リンクウィズ㈱＝浜松市中区高林1―8―43・吹野豪社長＝は、工業用ロボットシステムのソフトウェア開発を行う。

「徳をもって事業の基とす」を理念に、2015年3月に創立し、生産、設備分野で徐々に幅広く得意先を広げ頭角を現してきた期待の1社だ。

昨今の労働人口の減少で、今後は更にロボット化が進む事が予想されるが、精密さが求められる単純作業はロボットに任せ、人はより創造的な仕事に携わる事が出来る。

ものづくりの現場において同社が担うロボットをより使いやすいツールにしていく努力が、今後の地域の製造業を支えていく事だろう。

パイフォトニクス

パイフォトニクス㈱＝浜松市東区天王町673、ホロライトビル1F・池田貴裕社長＝は、2006年の創業以来最先端の光技術を様々な分野に活用し注目を集めている。

LEDを光源とする「ホロライト」は、レーザーに代わる光源技術として舞台演出などをはじめとし、建築分野や実験分野などにも応用されている。また、波打ち際の波だけに光を照射してライトアップする「ナイトウェーブ」は幻想的な景色を作り出し、世界の観光地などに向けて提案中だ。

光の持つ可能性を様々な角度から追求する同社の動向に注目が集まる。